

## 東パキスタン難民の大規模定着事業

— ダンダカラニヤのケース —

はま 　　うず 　　てつ 　　お  
浜 　　渦 　　哲 　　雄

はじめに

### I 調査目的と調査方法

1. 調査の目的
2. 調査の方法

### II ダンダカラニヤ・プロジェクトの概況

### III 調査結果と若干のコメントおよびその他聞き取り事項

1. 調査結果と若干のコメント
2. 豊かな入植者に共通する若干の特徴
3. その他聞き取り事項

むすび

はじめに

この調査は、東パキスタン（現在のバングラ・デッシュ）難民の定着のために、大規模な開墾地への入植が、いわゆる難民問題の解決策としてどの程度有効であるかを知る手がかりをつかむために行なったものである。調査対象地域としては、中央政府の直轄事業として東パキスタン難民の入植が1960年以来実施されているダンダカラニヤを選び、同ゾーン内126カ村のなかの15カ村より55家族を抽出して行なった。難民の入植定着は西ベンガル州内はもとより州外においても行なわれているが、ダンダカラニヤ・プロジェクトは最大規模のものであること、たまたま日本政府が同プロジェクトを援助しており、現地に日本人農業専門家の方たちがおられ、調査に対する協力を得やすいために選んだものである。

この調査の実施にあたっては日本の OTCA（海外技術協力事業団）、OTCA デリー海外事務所の稲垣氏、ダンダカラニヤで農業指導にあたっておられる太田団長、嶋田氏、水越氏、菅原氏、大口氏、福地氏に、多方面にわたって協力と援助をいただいた。とくに現地で農業指導にあたっておられる方々が、ダンダカラニヤ・ディペロップメント・オーソリティー（DDA）のパラルコート・

ゾーン事務所のスタッフと、強い協力、相互信頼関係を作っておられたため、DDA の協力と援助が得られて、調査がスムーズに行なえたことに感謝するものである。最後に貴重な時間をさいて面接に応じてくださった入植者の方々に心よりお礼を申し上げたい。

### I 調査目的と調査方法

#### 1. 調査の目的

西ベンガル州政府の *Economic Review 1970—71* によれば1970年12月31日までに、東パキスタンより445万1699人の難民が西ベンガル州に流入している。西ベンガル州に流入した約440万人の難民のうち西ベンガル州外に住んでいる難民は約59万人で、残りはカルカッタとその周辺工業地帯に約122万人、西ベンガル州内の他地域に約263万人が住んでいる（注1）。州政府統計によれば、1970年7月15日の時点において、約45万3000人が西ベンガル州外に、228万人が州内に定着し、146万5000人、すなわち流入した難民の3分の1が未定着のままになっている（注2）。未定着難民の居住地別内訳は発表されていないが、1970年12月31日現在の居住地別の難民数から定着者数を差し引いてみると大まかな数字が得られ、100万人以上の未定着難民が西ベンガル州内に住んでいることになる。

難民の西ベンガル州内への流入自体が、農村における土地への圧力、カルカッタ市における住宅不足、人口の集中による交通混雑、水不足、排水施設の不足等にみられる都市機能の低下をもたらししているうえに、多数の未定着難民は、失業者の増加、犯罪の増加等の社会問題を引起こしている。西ベンガル州にとって100万余の未定着難民の存在は大きな経済的、社会的負担になっており、しかも州内へのこれらの難民の定着は不可能に近い状態にある。難民に分与する農地は、西ベンガル州内にはほとんどなく、失業者数が増加の一途をたどっているため、

第1表 東パ 難民の分布

地 域	旧 難 民 1963年12月までに流入	新 難 民 1963年12月以降流入	難民総数	比 率
1. カルカッタ・周辺工業地帯	1,026,364	201,859	1,228,223	27.59
2. 1. を除く西ベンガル州内	2,173,636	456,755	2,630,391	59.09
3. 西ベンガル州外	164,693	428,392	593,085	13.32
合 計	3,364,693	1,087,006	4,451,699	100.00

(出所) Government of West Bengal, *Economic Review 1970-71*, p. 15.

工業、商業、政府機関等への就職も限られている。したがって、難民の定着は西ベンガル州政府の能力をこえる問題であり、州政府は中央政府から難民の救済援助を受け、また中央政府に難民救済事業を行なうことを要請してきた。

都市に居住する難民は、政府のローンによって商売を始める場合などを除いて、雇用機会が全体として増加しないかぎり、すなわち失業問題全般が緩和しないかぎり、定着は困難である。カルカッタ大学の調査によれば、カルカッタ市内に居住する難民の教育水準は、旧来のカルカッタ居住者、他州からの流入者に比べて高く、ホワイト・カラーの職を求めるものが多い。しかし、ホワイト・カラーの職を得ることは容易でなく、東パ難民の失業率は旧来のカルカッタ居住者、他州からの流入者に比べて3倍も高くなっている(註3)。都市における難民の定着は、難民の優先雇用政策がとられていない現状においては、雇用機会全般の増加以外になく、インド政府の失業対策いかにかかっている。

一方、農業に従事していた難民の場合、基本的な生産手段であり財産である土地を失ったため、居住地において土地が得られなければ、シェア・クロッパーあるいは農業労働者にならないかぎり、農業を継続できない。土地に対する人口圧力の強い西ベンガルでは、ほとんど財産をもたないで流入した難民が、農地を得ることはきわめて困難であり、また土地を取得するための政府援助も得られず、農業難民は他の職業に従事していた難民とは別の困難に直面することになった。

農業難民の定着には農地を与えるのが最も有効かつ適切な方法であり、政府は東パ難民のために、西ベンガル州内外において、開墾により農民を入植させる努力をしてきた。ダンダカラニヤ・プロジェクトはこれらのうちで最大規模のもので、すでにダンダカラニヤ地域には10

万人以上の難民が入植している。ダンダカラニヤには農業難民だけでなく、商業に従事していた難民が商人として入植し、村に不可欠のかじや、大工、洗濯屋、床屋、薬剤師なども少数ではあるが入植している。

ダンダカラニヤ・プロジェクトが最大規模のもので、約10万の入植者があつたにしても、未定着難民数に比べれば小さく、さらにいくつかのダンダカラニヤなしには難民の定着問題は解決しない。今回の調査は、東パとは種々の点で自然環境が異なり、文化的にもベンガルと切離されたところへの難民の定着が、どの程度うまくいっており、またどんな問題があり、今後もダンダカラニヤのような大規模開墾を難民定着策としてとりうるかどうかの手がかりをつかむことを目的として行なった。

## 2. 調査の方法

難民の定着ということを知るのが目的であるため、以下のような質問を設定し、入植家族の世帯主(世帯主不在の場合は代理者)と面接して回答を得る方法で行なった。

### 〔質問事項〕

- (1) 氏名・年齢
- (2) ベンガリ語の読み書きができますか。
- (3) 家族数 (イ) 大人。(ロ) 子供。
- (4) 何年に東パを去り、インドに流入しましたか。
- (5) どのディストリクトに住んでいましたか。
- (6) 現在も東パ(パングラ・デッシュ)にあなたの親戚がいますか。
- (7) あなたは東パで農業に従事していましたか。
- (8) 何を栽培していましたか。  
(イ) 米。(ロ) ジュート。(ハ) その他。
- (9) 何ビガアの土地を耕作していましたか。
- (10) 自分の土地を耕作していましたか、それとも他人の土地を耕作していましたか。
- (11) あなたは次のいずれでありましたか。

## 現地報告

(イ) ジョトダール。(ロ) 自作農。(ハ) 折半小作。(ニ) 農業労働者。(ホ) その他。

- (14) あなたは何年にダングカラニヤへ入植しましたか。
- (15) ダングカラニヤで何ビガーの土地を耕作していますか。
- (16) ここでは何を栽培していますか。
- (17) あなたの収入は東パとここではどちらが多いですか。
- (18) あなたは東パキスタンとここではどちらが快適ですか。
- (19) 東パと比べてここではどんな点が不便ですか。
- (20) あなたはここに永住するつもりですか。
- (イ) インドのどこかほかの地域に住みたいですか。
- (ロ) バングラ・デッシュに帰りたいたいですか。
- (19) ダングカラニヤに住みたくない理由は何ですか。
- (20) 今後、ダングカラニヤの条件がよくなり、生活がゆたかになるとお思いますか。
- (21) 牛を何頭飼っていますか。
- (イ) 役牛。(ロ) 乳牛。
- (22) 自家用の井戸がありますか。

質問事項の(20)、(22)は現地において追加し、(22)については途中で追加したので、面接者すべてから回答を得ることができなかった。ダングカラニヤの訪問は今回が初めてであり、現地を直接に見ずに質問事項を設定したので(20)、(22)の追加を必要とすることを現地で気づき、追加することになった。

一般に、東パ難民のダングカラニヤへの入植についてはうまくいっておらず、脱落者が多いという新聞、雑誌の記事、レポートが多く、Forest of Punishment, Veritable hell (ダングカラニヤの字義通りの意味は Forest of Punishment) という言葉さえ使われており、そういった先入観をいだいていたため、脱落の原因がどこにあるかを知り、どういふ措置によってそれを是正しうるか、政府はどいう政策をとっているかを知ることによって質問事項を設定した。もちろんこれだけの質問事項によって知りうることはごく限られており、きわめて大ざっぱな結論しか引出せないことは十分承知している。

調査対象入植者については行動可能範囲内で10年前、5年前、3年前、1年前に入植した農家を各10戸ずつ選定する予定であったが、予定していた村内で、入植者の移動があったりしたため、調査対象が55戸に増加した。

(注1) Government of West Bengal, *Economic Review 1970-71*, p. 15.

(注2) *The Bengal Chamber of Commerce and Industry*, West Bengal, p. 23.

(注3) Sen, S. N., *The City of Calcutta*, p. 28.

## II ダングカラニヤ・プロジェクトの概況

調査結果について述べる前に、ダングカラニヤ・プロジェクトの概況とその進展について簡単に紹介しておく。

ダングカラニヤ地域開発は、東パキスタンからの難民を入植させることおよび原住部族民に対する定着策ならびにこの地域の総合開発を目的として、インド中央政府の決議によって、1958年9月にインド中央政府復興省の機関としてダングカラニヤ開発庁(DDA)が設置されたことに始まる(注1)。

この地域の開発は1960年から着手された。ダングカラニヤはマディヤ・プラデッシュ州バスター・ディストリクトとオリッサ州コラプート・ディストリクトにまたがっており、面積は50万ヘクタール以上ある。ダングカラニヤは行政区画上、ウメルコート、ライガール、パラルコート、マルカンギリの四つのゾーンに分けられており、各ゾーンには行政上の最高責任者として、Zonal and Tribal Administrator がいる。DDAは1971年3月までに総額7億2900万ルピーの資金をこの事業のために投じている。入植者家族1戸あたりの費用はトライブ(2586家族)の場合7900ルピー、難民の場合(1万3966家族)1万4479ルピー(2618ルピーのローンを含む)となる。中央政府事業の中でも1戸あたりの支出高の多い点では、DDAの事業は最高の部類に属するものではないかと思われる。

ダングカラニヤ地域への難民の入植進行状況は第2表の通りである。1960年より入植が始まり、1971年3月末までに1万9757家族がプロジェクト・エリア内のキャンプに移動し、1万3966家族が入植地に住んでいる。プロジェクト・エリア内まで移動してから最終的に入植地に住んでいない家族、すなわち入植を放棄した家族は5791家族で、プロジェクト・エリア内に移動した家族の約29.3%にあたる(注2)。入植放棄のプロセスを見るならば、プロジェクト・エリア内のキャンプ段階で入植を放棄した家族は1338家族、入植地にはいりながら入植を放棄した家族4453家族となっている。いったん入植した家族が入植後何年たつて、またどういふ理由で入植地を離れたかは

第2表 計画期別人植進行状況

	第2次計画 1961年3月 まで	第3次計画 1961—1966	1966—67~ 1968—69 年次計画	第4次計画	
				1969—70	1970—71
プロジェクト・エリアに移動した家族数	2,448 2,448	10,192 12,640	5,494 18,134	1,040 19,174	583 19,757
入植場所に移動した家族数	2,210 2,210	8,690 10,900	5,814 16,714	972 17,686	733 18,419
実際に入植地にいる家族数	2,206 2,206	6,665 8,871	4,019 12,886	534 13,420	546 13,966
農地を割当てられた家族数	789 789	7,514 8,303	3,246 11,549	936 12,485	714 3,966
開かれた村の数	42 42	143 185	65 250	14 264	8 272
住宅建設戸数	262 262	5,530 5,792	2,126 2,918	382 8,300	438 8,738
事業資金融資を受けた商人の数	37 37	80 117	465 582	87 669	75 744

(出所) DDA, *Dandakarnya Project—Financial Review of Progress end of March 1971*, p. 21.

(注) 下段はいずれも累計。

第3表 土地利用状況

用途	面積 (エーカー)	比率 (%)
a. 難民定着地	91,506	69.1
b. 総合開発計画用地	9,717	7.3
c. トライプの定着地	26,640	20.1
d. その他(耕作不適地他)	4,465	3.5
合計	132,328	100.00

(出所) *Dandakarnya Project*, p. 6.

不明である。DDAのゾーナル・オフィスは入植放棄者に関する資料をもたず、隣家の人に聞いてもはっきりした理由はわからない場合が多い。入植者はDPAに対する債務があるため、行先を知らせず逃げだすことになるものと思われる。

いったん入植地にはいった家族は家屋建設資金、営農資金(役牛、乳牛、農具、種子・肥料等々の入手に要する1015ルピー)の融資を受け、農業を始めるが、最初の2年間については年間6カ月分(6月から11月まで)の生計補助金が与えられる。生計補助金の月額は家族構成によって異なり、最低(夫婦のみの家庭)40ルピーから最高75ルピーまでとなっている。最初の年は入植農家は共

第4表 難民定着地の利用状況(単位: エーカー)

種類	M. P 州			オリッサ州			総計
	コンダガオン	パララコート	合計	ウメルコート	マルカングリ	合計	
1. 農地将来	1,423	26,765	28,188	20,103	24,217	44,320	72,508
2. 利用農地	40	1,830	1,870	2,432	2,127	4,559	6,429
3. 農地公共用地	227	3,565	3,792	2,617	3,984	6,601	10,393
4. 大小タンク	27	737	764	775	637	1,412	2,176
合計	1,717	32,897	34,614	25,927	30,965	56,892	91,506

(出所) *Dandakarnya Project*, p. 6.

第5表 作物別耕作面積

秋作 (Kharif year)	1966	1967	1968	1969	1970
米	19,718	22,973	32,221	34,391	36,812
メスタ(ジュート)	9,297	12,398	7,835	12,397	16,571
多収種	2,927	6,889	9,859	7,923	6,041
油種	9,386	12,871	8,960	7,632	5,177
豆	—	4,211	2,253	4,043	3,037
その他作物	3,880	2,358	2,515	3,362	882
総作物面積	45,208	61,700	63,643	69,748	68,520

(出所) *Dandakarnya Project*, p. 21.

## 現地報告

同耕作をし、2年目から1～6エーカーの土地が貸与される(パラルコート・ゾーンの場合)。貸与される土地の大きさは灌漑の度合によって決められているようであるが、入植者が多くなるにつれて土地の整備が間に合わず、あとからの入植者の保有面積は少なく土地条件も悪くなっているようである。初期の入植者は一般に灌漑地2エーカー、非灌漑地4エーカー、合計6エーカーの土地を借受けているが、5年未満の入植者の場合には灌漑地2エーカー、非灌漑地2エーカー、合計4エーカーの家族(PV63)、灌漑地2エーカー、非灌漑地1エーカー合計3エーカーの家族(PV119)、非灌漑地のみ3エーカーの家族(PV125)もある。1エーカーの土地を貸与されている村(PV55)はディーゼル・ポンプによる周年灌漑が行われており、入植者はバナナ、ベテルリーフ、野菜などの換金作物を作っている。農家の生産作物は周年灌漑地域を除いてほとんど同じで、米、大麦、ごま、メイズ、メスタなどを作っている。生産作物は各ゾーンともにほとんど大差なく米が主作物となっているようである(第5表参照)。

第6表 パラルコート・ゾーンの農家作物生産高と平均年収 (単位: マウンド)

秋作	1967年	1968年	1969年	1970年
1. 米	33.30	50.31	33.16	39.77
2. 多収穫メイズ	15.65	12.81	8.32	6.16
3. 油糧種子	5.09	4.99	1.95	0.70
4. 豆類	3.70	5.42	0.24	1.80
5. メスタ	4.87	2.32	2.80	4.79
6. 平均年収(Rs)	1,998	1,984	1,170	434

(出所) Dandakarnya Project.

パラルコート・ゾーンの農家の平均作物生産高と平均年収は第6表の通りである。平均年収は1967年1998ルピー、1968年は1984ルピー、1969年1170ルピー、1970年1434ルピーとなっている(入植戸数5706戸)。1969年と1970年の年収が大幅に低下しているが、その原因は不明。パラルコート・ゾーン内にはPV1からPV126まで126カ村あり、PV1は1960年、PV126は1972年に開村されており、同じゾーン内においても古い入植者と新しい入植者、灌漑農地保有量、乳牛の有無、商業、漁業等の兼業の有無によって所得にかなり大きな開きがみられる。

(注1) 海外技術協力事業団『インド、ダンダカラニヤ農業協力基礎調査団報告書』1ページ。

(注2) Dandakarnya Project, p. 16.

## III 調査結果と若干のコメントおよび その他聞き取り事項

### 1. 調査結果と若干のコメント

#### (1) 世帯主の年令とその分布

年 代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
人 数	6人	13人	12人	9人	9人	1人

(注) (1) 調査漏れが5人あり、調査対象は50人。

(2) 戸主の平均年令は44.6歳。

(3) 年令を正確に知らないためか、30歳、35歳、40歳、50歳といった区切りのよい数字で答えた者が非常に多かった。

(4) 入植者の宗教はすべてヒンドゥー、所属カーストは不明。

#### (2) 家族構成(入植年別)

	1961-3年	1965年	1967年	1972年	全 体
大 人	5.8人	3.9人	4.5人	2.4人	3.3人
子 供	3.4	2.5	4.1	2.9	3.0
家族数	9.2	6.4	8.6	5.3	6.3

(注) 大人は17歳以上。

家族数は平均6.3人で大人は3.3人。結婚した息子夫婦が両親と一緒に住んでおり、一般に入植年次が古いところほど家族数が多い。海外技術協力事業団の『インド・ダンダカラニヤ農業協力基礎調査団報告書』(1969年9月)によれば、平均労働力は2.5人以下とされているが、現時点ではもっと多くなっているのではないかと推測される。一般に開墾地入植の場合、労働力が多いことは収入の多いことにつながるが、パラルコートでも労働力の多い、古い入植農家の方が家の作り、敷地内の作物の成育状況、家畜保有頭数等からみて収入が多いように見受けられる。

#### (3) インドへの移動年次

年次	1951年	1954年	1955年	1957年	1961年	1963年	1964年	1965年	1968年	1969年	1970年
家族数	2	2	3	2	1	3	20	2	3	15	2

1964年にインドへ移動した家族が最も多い。1964年は1970年まででは東パシフィックの流入が66万7125人と最も多かった年なので、これは難民の流入ピーク年と一致している。1969年に移動した家族が次いで多くなっているが、

これは調査した村にたまたま1969年移動者が集中していたためと思われる。

パラルコート・ゾーンへの入植者のインドへの移動年次をみると、難民一般の流入に比べておくれているが、これは農村地域でのコミューナルな対立が都市ほどひどくなかったのか、あるいは土地を棄てきれずに遅くまで残っていたためと推測される。

(4) 出身ディストリクト

ディストリクト	パリシャル	コミンカ	マイシナ	ダック	クルナ	ファリドプール	ノアカリ	シレット
家族数	2	4	2	8	16	11	1	1

出身ディストリクトとしてはクルナ、ポリシャル、ファリドプール、ダックが圧倒的に多い。

(5) 東パに親類がいるかどうか

有	無	合計
39人(70.9%)	16人(29.1%)	55人(100%)

55家族の世帯主のうち親類がまだバングラ・デッシュにいと回答したものは34人で約71%が親類を残していることになる。しかし、親類と音信があると答えたものはごく少数で、インドへ流入後、音信不通となっているものが多い。

(6) 耕作経験の有無

農業を営んでいた		非農業		農業を営んでいなかった
主	従	主	従	
43	4	4	12	8

55人のうち農業経験の全くないものは8人でその内訳は公務員1、織物業1、漁業1、商業2、教員1、年令的に従事できなかった2となっている。東パで教員をしていた人は入植地でも教員をしている。農業以外の職業を主とし、農業に従事していたものの内訳は商業1、職人1、漁業1、製糖業1である。調査対象となった55人のうち47人まで農業経験があるが、入植を放棄したものの職業経歴が不明であるため、農業入植者として不適格な人間が多く送り込まれたかどうかは不明である。

ダンダカラニヤへの入植者については最初のキャンプに入ったとき、中央政府復興省の Screening Report に職歴、学歴、東パに残した農地面積などを記入しており、またプロジェクト・エリアに送り込まれる前に農業経験の有無などについて Declaration Form に書込まれているので、農業入植者としての適性調査は一応なされて

いるようである。

(7) 東パでの主作物は米、ジュート、バテルリーフ(パン)で、ほかにタバコ、マスタードを作っていたと答えたものが少数あった。

(8) 東パでの耕作面積

土地保有面積	10ビガー以下	11~20ビガー	21~30ビガー	31ビガー以上
農家数	20	13	11	6

(注) 1戸は土地保有面積不明。

東パで農業を営んでいたもののうち、自己所有地のみを耕作していたものは40人、借地と両方を耕作していたものは11人、借地のみを耕作していたものと農業労働者はゼロ、31ビガー以上の耕作者は1人を除いて兄弟との共同耕作で、1人は完全に雇用労働によって耕作していた。東パでの農家1戸あたりの平均耕作面積がわからないため、入植農民の東パでの地位がどの程度のものであったかつかめないが、西ベンガルの平均と比べれば悪くない。

(9) パラルコートでの耕作面積

村	土地		合計	戸数
	灌漑地	非灌漑地		
PV 7	0	5.7	5.7	3
23	3	3	6	3
26	2	4	6	4
32	2	4	6	3
45	0	6	6	3
53	0	6	6	6
54	0	6	6	1
55	1	0	1	5
56	2	3.5	5.5	2
58	3	1	4	3
63	2	2.5	4.5	4
66	不明	不明	3.5	2
67	不明	不明	3.5	1
119	2	2	4	5
125	0	3	3	10

(注) (1) PV7は第1回入植村であるが、古い入植者がバングラ・デッシュに帰ったため、この3家族は1969年に入植した者。

(2) 不明は調査漏れ。

ダンダカラニヤの入植者には将来の土地再配分の可能性があるため、所有権は与えられず、耕作権のみ与えられている。政府より貸与された土地の耕作面積は1エーカーから6エーカーまでさまざまである。土地のまたがしが少数ながら行なわれており、政府の balanced land を除く他人の土地を耕作していると答えたものが数人いたが、借りている土地は1人を除いていずれも1エーカー以内であった。みずから土地(3エーカー)を貸して

## 現地報告

いると答えたものはP V23で教員をしている入植者のみであった。

### (10) パラルコートでの栽培作物

パラルコートでの栽培作物は第5表の通りで米が主作物、メスタ、ゴマが重要な換金作物となっている。ただP V55の入植者はバナナ、ペテルリーフ、野菜等の換金作物のみを作っている。バナナ、パイナップル、マンゴーを家の敷地内と付属菜園で作っているところがかなり見受けられた。ココナツは地理的条件より作れない。

### (11) 収入と生活環境の比較

収入				生活環境		
東バ	パラルコート	同じ位	不明	東バ	パラルコート	同じ位
38	8	3	6	38	16	1

パラルコートでの収入が東バにいた時に比べて多いと答えたものは8人である。そのうち4人の場合は農業以外での現金収入が多いことによるものと思われる。P V32の場合は牛乳を売って月約200ルピーを得ており、個人井戸も持っている（現在は牛が落ち閉鎖中）、P V26の場合は商店を兼業しており、トラックも購入している。P V119の場合は漁業によって年間1000ルピーほど得ている。P V7の場合は農閑期に大工としてDDAで働くため、日給4ルピーを得ており（一般の労働者の賃金は1日2ルピー）、乳牛1頭を持っている。P V125の3人については人力車引きをしていた1人を除いて、こちらでの収入が多いと答えた根拠が不明確で、入植1年目のことを考慮すると迎合的な答えをしたとみられる。P V66の場合は乳牛が1頭おり、家族がすべて働き手となっている。不明と答えたものは入植1年目で最初の収穫が終わっておらず、比較のしようがないもの。

生活環境については、コミユナルな対立紛争の側面を重視したものは、回教徒によるさまざまな生活妨害の心配がなく、パラルコートの方が安心して住めるので良いと答えた。一方、コミユナルな問題を考えずに水の不足、野菜、果物、魚等の不足といった生活条件を重視した人たちは東バが良いと答えた。したがって、二つの点を独立の質問事項にしていたら、前者についてはすべてパラルコート、後者については東バという回答がなされた可能性が大きい。東バに住んだことのある人間は、ダンダカラニヤの水不足が農耕と生活のあらゆる面での悪条件の根本原因であると考えているようである。とくに、今年は旱害のために稲のできが悪く、土地が灌漑され、タンクが建設されないと快適な生活はできないことを訴え

るものが多かった。

### (12) 東バでの生活に比べてここではどんな不便があるか

回答者のすべてが水の不足、魚、ミルク、バナナ、マンゴー、ジャクフルーツなどが自由に手に入らないことを訴えた。ベンガル人にとって、蛋白質の2大供給源である魚とミルクの不足はきわめて重大問題であるが、乳牛は5年以前に入植した農家でも、持っていない家があり、魚も水不足のため供給が少なく、価格が高い。入植者にとって生活条件の変化に伴うこのような不便は外部の人が想像する以上に苦痛のようである。

### (13) あなたはここに永住しますか

回答者55人すべてが永住すると答えた。条件付きの回答として、政府が土地をよくすれば永住する、どこにも行く所がないから住むというものが2人あった。永住すると答えたものにも、ここ以外どこにも行くところがないから永住するとの印象を受ける回答がかなりあった。バングラ・デッシュに帰国したいかとの質問に対しては回答者すべてがノーと答えた。

### (14) 今後、ダンダカラニヤの諸条件がよくなり、もっと豊かな生活ができるようになると思うか

47人がよくなると答え8人が、何ともいえない、わからない、神の恵み次第と答えた。よくなると答えた人の中にも、次のような条件をつけているものがある。

- イ 日本農法を取入れ、生産性があがれば（1人）
- ロ 政府の政策がよければ（3人）
- ハ 土地が灌漑されれば（これに類する回答）（13人）
- ニ バナナ、ペテルリーフの栽培をふやすことによつて（3人）
- ホ 灌漑地をもっともらえれば（1人）
- ヘ 自分たちが努力すれば（1人）
- ト きわめて緩慢な速度で（1人）

この質問に、途中からどうしたら生活が豊かになるかとつけ加えたため、(1)から(7)までのような回答が得られたものである。

### (15) 牛の保有頭数

調査戸数47戸の牛の総保有頭数は169頭、うち役牛118頭、乳牛37頭（不明14頭）である。牛の保有頭数ゼロの農家は1戸（金の調達のため売却）で、役牛（水牛を含む）保有戸数は44戸、乳牛保有戸数は22戸である（2戸については内訳不明）。調査対象戸数の半数以上が乳牛をもっていない。乳牛の調達難のため、政府は5年以上も前に入植した農家にすら乳牛を供給していない。

2, 3年前の入植者でも現金収入のある人は市場で乳牛を買っている(代表的な例はP V55の5戸の農家)。乳牛の価格は乳の出る量によって異なるがP V7の農家は175ルピーで購入したと答えた。

役牛は入植初年度にすべての農家にローンで供給されるが、その役牛すら売ってしまったと答えた農家が2戸あった(1戸は水牛に買換えた)。役牛の市場価格はペアで100-400ルピーとのことである。

役牛のいない農家は農繁期に役牛を借りるが、役牛2頭と鋤の賃賃料は1日につき6ルピーである。

#### (10) 自家井戸の有無

調査戸数55戸のうち、自家用の井戸があると答えたものはP V32の3戸, P V26の4戸, P V63の1戸(他に1戸あるとの話)のみであった。P V58の1戸は井戸を掘り、9フィートで水に達したが、翌年井戸がつぶれ、現在は無い。P V163では7.5フィートで水があるとの話であるが、どの家も個人井戸をもっていない。個人井戸を掘る場合には、政府が最高150ルピーのローンを与えることになっており、P V32, P V26の農家はローンを利用して掘っている。個人井戸の場合、深さは10フィート前後が限界のようである。個人井戸のない所はすべて政府の掘った共同井戸を使用している。

P V32, P V26の場合、水は1年中かれないので、井戸灌漑も可能であるが、どの農家もそれをやっていない。東パでは水の供給が豊富で井戸灌漑の必要のないところが多く、多くの労力を必要とする井戸灌漑はペンガル人には好まれないようである。

#### 2. 豊かな入植者に共通する若干の特徴

パラルコート・ゾーン入植農家の平均年間所得は約2000ルピーと推定されている。インタビューによって明らかに収入が2000ルピーを越していると思われる入植者がかなりおり、彼らには一つの共通する特徴がある。それは農業以外での現金収入を得ていることである。彼らは現金収入を次のような方法によって得ている。

- (i) 牛乳の販売
- (ii) 商店の兼営
- (iii) 漁業
- (iv) 大工
- (v) DDAの建設現場での常用人夫(主として労働力の多い農家)
- (vi) 教員
- (vii) パナナ, ベテルリーフ, 野菜等の換金作物の栽培  
牛乳の販売によって現金収入を得ていると答えた農

家は1戸(月約200ルピー)だけであったが、乳牛の保有頭数の多い農家は、乳牛をもたない農家やDPAのスタッフとその家族に牛乳を売っているとのことである。農業入植者として入植しながら、村内で商店を兼営している農家が各村に少なくとも1戸はある。村の農家数は30~90戸で、商店の規模はごく小さいが専業農家に比べると収入が多そうである。

漁業による収入があると答えたものは3人で年間500~1000ルピーの収入を得ている。

大工(広義の建築職人)の賃金は4~7ルピー、DPAの建設現場で雇用される未熟練労働者の賃金は1日2ルピーで、6日間連続勤務すると2ルピーの皆務手当が加算される。技能を持つものと持たないものとの賃金格差は2倍以上となっている。

教員をしている人は3人いるが(1人は世帯主)、教員の給与は月204ルピーで勤務時間は10時より16時まで。

P V55の周年灌漑地1エーカーを保有する農家はバナナ, ベテルリーフ, 野菜等の換金作物を栽培しており、入植3年目でありながら、調査対象農家5戸がすべて乳牛を市場で買い保有している。1エーカー当たりの収入も東パの場合よりも多いと答えた入植者もあり、農業入植者としてはP V55は最も条件がよく、うまくいっているのではないかと思われる。

専業農家で比較的高い収入をあげていると思われるものは、P V55を除くときわめて少ない。別言すれば、本来農業入植者のための入植地であるにもかかわらず、専業農家が兼業農家に比べて収入が少ないことは土地の条件が悪く、入植者の農業に対する意欲も低いことを意味している。たとえば、自家井戸を持っている入植者は井戸灌漑によって1年中野菜を作れるにもかかわらず、東パで井戸灌漑による農業をやっておらず、より多く労働投下を必要とする井戸灌漑はやっていない。一般に従来以上の労働を投下して、自ら土地条件をよくし、生産性をあげようとする傾向は、ほとんど見られないようである。

以上のような事実に照らして、今後、入植者の収入を増加させるためには、ダムからの用水路の延長によって灌漑地を拡大することが絶対条件である。現在、大部分の入植者はメスタ, ゴマ, 野菜等の販売によってしか現金収入を得ることができないが、土地が灌漑されれば、農業の生産性があがり、バナナ, ベテルリーフ, 野菜などの換金作物の生産地域が広がり、養魚が可能となり、入植者の現金収入も増加することになる。



## 現地報告

### 3. その他聞き取り事項

#### (1) 臨時出費とそれの調達

結婚、その他の臨時出費の調達は古い入植者、バザールの商人（入植者）より行なわれる。専門の金貸しはおらず、外部からの金貸しも入り込んでいないが、小金持ちが金貸しの役割を果たしている。金利は月1割で返済は農作物、主としてメスタ（1エーカーで約300ルピーの収入）、ゴマの売却時に行なわれているようである。

#### (2) 結婚と結婚持参金

女性の結婚年齢は14~16歳が多いが、少しずつ結婚年齢は上がりつつある。結婚は入植者間で行なわれており、外部のものとの結婚はまずないとの話である。結婚の際の女性の持参金について、1人は約300ルピー（大部分は装飾品で持参）、1人は400~500ルピーと答えた。キャンプにいる当時に息子2人を結婚させた父親は、嫁はクロス1枚だけで持参金を全然持ってこなかったが、キャンプではしかたのないことであつたと話していた。

#### (3) 小作地と小作の条件

政府より貸与された土地以外の土地を耕作していると答えたものが数人いたが、耕作している小作地のほとんどが1エーカー以下で、わずかに1人だけが2エーカー耕作していた。土地が小作に出されるのは世帯主の死亡、あるいは病気、役牛がない等の理由による場合が多いとのことである。小作の条件は小作人が牛、肥料代をもち、収穫物は50:50で折半する。

## む す び

ダングカラニヤへの入植を望みながら途中で入植地を去った家族は5791家族である。このうち1338家族はゾーン内の一時収容キャンプ段階で入植を放棄している。この段階で入植を放棄した人たちがどこに行ったかについては全く情報が得られなかったが、入植地に着いて以降に入植地を去った人たちは大部分が東パに帰ったようである。とくに1971年12月にバングラ・デッシュが実質的に成立したため、1971年12月、1972年1月には入植者が集団でバングラ・デッシュに帰国した。P V 117では1戸を除いて、すべてがバングラ・デッシュに帰国したとのことである。P V 125の入植者の話では、ゾーン内の一時キャンプ収容中にバングラ・デッシュが成立したため、キャンプにいた40家族のうち31家族が71年12月、72年1月にバングラ・デッシュに帰国した。また、P V 119でも33家族が71年12月、72年1月にバングラ・デッシュに帰国したが、16家族が再び元の入植地に戻ってきた。

一方、第1回入植地であるP V 7では入植を放棄した家族は5ないし6家族、P V 26でも60家族が入植し、それ以後9家族が入植を放棄したにすぎず、バングラ・デッシュの成立はそれほど入植者に大きな影響を与えていない。一般に、入植年次の新しい入植者ほど東パを離れてからの歳月が少なく、望郷の念が強く、またこちらでの生活基礎も相対的に弱いので、バングラ・デッシュの成立を契機に帰国したものとみられる。

今後、バングラ・デッシュ成立のような強力な入植放棄促進要因は考えられない。しかし、新規入植にとっては、貸与地が従来より少なくなり、しかも非灌漑地が多くなり、農耕の条件が悪化しているため、入植放棄者が増加する可能性がある。とくに今年は旱害のために3~5割の農作物の減収が予想されており、新規入植者にとっては厳しい年になるであろう。パラルコート・ゾーンの水の供給についてみるならば、カルカット・ダム在完成により、今後2、3年以内に灌漑地が相当に拡大し、農耕条件がかなり改善する見通しである。したがって、古い入植者の集団的入植放棄が起こる可能性はこれまでに比べると少なくなると考えられる。

1971年3月末において、ダングカラニヤに1万3966家族が実際に定着している。当初の計画では3万5000家族が入植することになっていたが、開墾他の一部をM・P州、オリッサ州に返還したため、最終的にどれだけの家族が入植するかは不明である。*Economic Weekly* 誌によれば、すでに6500家族の入植時点において3万5000家族の入植予算を消化しており(註1)、ダングカラニヤ・プロジェクトはインド政府にとってはきわめて高いものについている。実際、農家1戸に対して1万4479ルピーの金を投じるような農村関係の事業はインドではきわめて例外的なことであろう。当初の計画通り3万5000家族が入植したとしてもここに収容される難民の数は25~30万程度であり、難民問題の解決のためには第2、第3のダングカラニヤ・プロジェクトが必要である。

東パ難民の定着が、西パ難民の定着に比べて遅れており、かつスムーズにいったないのは、中央政府が西パキスタン難民には東パ難民に比べて多くの援助を与え、西パ難民に対しては財産補償しながら東パ難民にはそれをしなかったからだという強い批判と不満がベンガル人の間にはある(註2)。西ベンガルはまだ約100万人の未定着難民をかかえており、中央政府の差別的な政策が東パ難民の定着を遅らせているという主張は強い説得力をもち、この問題は中央政府攻撃の材料としてしばしば政治的に

も利用されてきた。中央政府としては、東パ難民が西パ難民に比べて差別的取扱いを受けてきたという批判はともあれ西ベンガル州の政治的安定、社会不安の緩和のために、今後も大規模な難民定着政策をとる必要がある。中央政府がダンダカラニヤ・プロジェクトのような開墾入植事業を今後も実施する計画を持っているかどうかかわからないが、多数の難民の定着政策としてはダンダカラ

ニヤ・プロジェクトは、大きな効果をあげていると評価してよいであろう。

(注1) *Economic Weekly*, March 2 1963.

(注2) *West Bengal*, p. 23.

(本稿はダンダカラニヤの難民入植に関する調査出張報告書を若干加筆修正したものである。)

(動向分析部)

調査研究双書

アジア経済研究所刊行

高梨博昭編

マレーシアの金融事情

372頁 2400円

マレーシアの通貨、金融制度について歴史的発展のあとを概観するとともに、マレーシアの金融構造、金融政策、各種金融機関の活動状況を解説し、その特殊性を指摘する。

高木良一編

アジアの開発金融

291頁 1900円

アジア諸国の経済成長に金融が占める役割を明らかにするために、経済開発阻害要因としての在来の金融構造、開発金融体制の整備と問題点、外資導入体制、国際金融機関の役割などを論述する。

原覚天編

発展の統合理論序説

306頁 2000円

経済学、社会学、国際関係論、数学など専門を異にする学者の協同研究によって、「発展」のための新たな理論的枠組みと、それを実証するための方法論をもとめ、独自の学問領域としての「発展学」の形成を模索する。

アジア経済出版会発売